
二つの空（仮題）

結城久楼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二つの空（仮題）

【Nコード】

N8053U

【作者名】

結城久楼

【あらすじ】

大学に落ちて無気力な浪人生になった女の子と、大学に受かって自堕落な大学生になった男の子、二人の話になる予定です。

序幕（前書き）

鬱々としていた時期に書き始めた、なんだか暗い小説です。
現段階ではプロットも何も無いのですが、当時の気持ちを出しながら気の向くままにのろのろと書いていこうと思います。行き着く先は私にもわかりませんorz

序幕

早朝から空を覆っていた粘土のような雲の下。

橘美雨は目の前にそびえ立つ六階建てのビルを見上げていた。

エントランスのすぐ上に取り付けられた電光掲示板は、午前八時三十分を示している。

ビルの壁面からは縦長の看板が張り出しており、それが進学予備校の校舎であることをでかでかと往来に主張していた。

エントランスにはガラス張りの自動ドアが設けられ、外の世界と中の世界とを物理的に切り離している。今日もまたビルの中では、何百人という生徒達が再戦に向けて、あるいは高みへの挑戦に向けて黙々と勉強に励むことになるだろう。

そして美雨もまた、三ヶ月前からこの予備校の生徒だった。

前期／後期試験とともに難関大学を受験して失敗し、加えて私立の滑り止めを持っていなかった美雨は、当然の結果として浪人生になった。三十七名いたクラスメイトのほとんどがそれぞれの進学先を決定していた状況下で、浪人という進路に希少価値があればこそ美雨も予備校への入校を納得した。

すぐにその幻想を打ち碎かれるとも知らずに。

「……もう、限界かな」

この日、通り慣れたはずのエントランスを美雨は潜ることができないでいた。

自動ドアが壊れているわけではない。怖い顔した事務員が中から睨んでいるわけでもない。

美雨が立ち尽くしている間にも、何人もの生徒がその横を通り過ぎてビルの中へ吸い込まれていく。

ガラスを一枚隔てた向こう側は戦場だ。誰も彼もが『合格』とい

う輝ける栄光に向かって、死に物狂いで突き進んでいく。

そんな過酷な環境に耐えられなくなったわけではない。ただ、周囲と同じ戦場に身を置いて周囲と同じ目標へ邁進する、その行為を身体が受け付けなくなってしまうただけ。

「きみ、どうしたの？ 入らないの？」

不意にぼんと肩を叩かれ、美雨は現実には引き戻される。声がした後方を振り返ると、恐らく同じ予備校生であろう青年が、にこやかな笑みを浮かべて立っていた。

「あ、もしかして入校の申し込みに来た人とか？ だったら入ってすぐの受付で」

「ごめん、ほっといて」

親身になって世話を焼こうとしてくれた青年の言葉を、美雨はばつさりと切って捨てる。

「え、何？ 今何て……」

「私に構わないでって言ったの」

男は予想外の返答に虚を突かれた様子だった。しかし美雨はそこに追い打ちを掛けるように、再度拒絶の言葉を発した。

「……あ、ああ、そう。それじゃ、ご勝手に」

親切を無下にされたことが気に食わなかったのだろう。青年は不快感を露わにそう言うと、肩を竦めて予備校の中へと歩き去っていく。

ビルの中に入った青年はその足で受付に歩み寄り、事務員に何事かを話し始める。その視線と指先がちらちらと美雨の方に向けられる。

美雨は急に居たたまれなくなり、くるりと半回転して自動ドアに背を向けた。

帰ろう。

自分に言い聞かせるようにぼつりと漏らす。

今日ここで引き返せば、次はもつと入り辛くなるかもしれない。そんな危機感には確かにあった。それでも、二本の足はきびきびと美雨の身体をバス停へと運んでいく。止めることはできなかった。

バス停にはすぐに到着した。簡易な屋根の下でバスを待つ間も、美雨は何度か予備校に戻ろうと試みた。今ならまだやり直せるかもしれないと、自分を奮い立たせようとした。しかし折れてしまった心が修繕されることはなく、身体は一向に動こうとしなかった。

やがて雨を掻き分けるようにしてバスが到着する。前方の扉が開き、何人もの若い男女が列を成して降車してくる。そのほとんどがバス停にひとり立っていた美雨を物珍しげに一瞥した後、閉じられた戦場へ向かっていく。

遅れて開いた乗車口に促されるようにして、美雨は素早くバスに乗り込んだ。

乗客のほとんどが予備校生だったのだろう。車内に残っているのは僅か数名だった。

「はあ……」

美雨は手近な座席に腰を下ろすと、瞼を閉じて深く溜息をついた。このままじゃきつと駄目になる。頭では理解していた。

しかしそんな焦燥感に蝕まれながらも、どうすればいいのか美雨には見当が付かなかった。

他人と同じなのが嫌いだ。

万物はより希少な存在にこそ価値があると、信じて疑わなかった。だから私は、模範よりも異端を好み、多数よりも少数を選んだ。群体の中に平穏を得れば、私という個人は消滅してしまう。

そんな恐怖心に突き動かされるまま、私は他人を避け、他人と関わるのを拒んだ。

始まりは、思春期特有のささやかな精神病だったかもしれない。でも気が付くと、それが私の生き方になっていた。

私の周囲からは一人減り、二人減り、私は徐々に孤立する。
やがてどの集団にも属さない、私というたった一人の集合が出来
上がる。

気付いたときには、既に退路は存在しなかった。

そして私も、引き返すつもりはなかった。

深まった孤独に酔いしれる。私にはその感覚が心地良かったのだ
から。

昼を過ぎた頃から、本格的に雨が降り始めた。

市内を周回する路線バスを降車した江坂龍一は、えさかりゆいちそのまま屋根の
ある待合室へと駆け込み、小さく舌打ちをした。

龍一と入れ違いに待合室を出た初老の男性を収容し、バスは土砂
降りの中へと消えていく。

その様子を無言で見送った龍一は、設置されているベンチにどっ
かりと腰を下ろした。

バスを降りる直前の行動を再現するかのように、もう一度スポー
ツバッグの中を掻き回す。

参考書、筆記用具、ルーズリーフ、文庫本、フェイスタオル、携
帯ゲーム機。

まるで闇鍋のように種々雑多な私物が顔を覗かせる。しかしやは
り目当ての物は見つからなかった。

大きく溜息をつき、龍一はバッグに突っ込んでいる手を止めた。
そして再び舌打ちをすると、勢いよく雨粒を撒き散らす空を忌々し
げに睨んだ。

そんな龍一を嘲笑うかのように、吹きすさぶ風の唸り声が室内に
反響し、雨はより激しさを増す。

「あー、濡れて帰るしかないな」

折りたたみ傘をバッグに詰め忘れた自分の不注意を呪いつつ、龍

一はあきらめ顔で小さく呟いた。

この待合室から龍一が部屋を借りているアパートまで、全力で走れば五分もかからないだろう。鍵を開け、部屋に突入し、濡れた服を脱ぎ捨て、バスルームで蛇口を捻ってお湯が出始める、その一連の動作におよそ一分ほど。

つまり、都合六分さえあればこの雨風から逃れることができる。にも関わらず、龍一はぼんやりと空を見上げたまま動かなかった。

壁を揺さぶる風の音。

屋根を叩く雨の音。

待合室という小さな世界に取り残されたのは、龍一の他にその二種類の音だけ。その場所はまるで嵐の中をさま迷うボロ船のようで、心地良い孤独感と甘美な不安感が充満している。

時折遠くから聞こえる自動車の音だけが、溺れゆく龍一を繋ぎ止めていた。

「……行くか」

やがて、何度目かわからないエンジン音で何度目かわからない覚醒を果たし、龍一はようやく待合室から出る決意を固めた。

ポケットをまさぐり携帯と財布を掴み出すと、そのまま防水加工のバッグに放り込む。それらと入れ替えに中からタオルを引っ張り出して、バンダナのように頭に巻き付ける。

そして徐にベンチから立ち上がり、龍一は躊躇無く雨の中へと足を踏み出した。

一步。五歩。十歩。龍一は決して走ることなく、濡れたアスファルトの地面を踏み締めるようにして着実に進んでいく。やがて二十歩を数える頃には、全身は既に濡れ鼠の様相を呈していた。

Tシャツが肌に纏わり付く。重くなったジーンズが歩みを妨げる。しかし興味がないと言わんばかりに、龍一は気に留めることなく淡々と歩みを進めていく。

実際、傘をさした歩行者からすれ違いざまに向けられる怪訝そうな視線も、隣を走り抜ける自動車からの水しぶきも、龍一にとって

は全てが他人事のように感じられる。

自分という人間の物語を冷めた目で観察するもうひとりの自分。自分自身の人生にすら実感を持つことができない江坂龍一という人間にとつて、虚構めいた世界は石ころほどの価値さえ見出せないものだった。

叫び声を上げたい。

自分はここにいる、ここで生きているのだと、名前も知らない誰かに知らしめたい。

たとえ無気力で無感動で無頓着で、救いようのない自堕落な人間だとしても。

ままならない世界を恨み、不甲斐ない自分を呪い、それでもなけなしの存在を主張したい。

しかし己が如何に矮小な人間であるか、それもまた自分が一番よく理解している。

情け無い自分に腹が立つ。捌け口の無い苛立ちが全身を蝕む。

飲食を拒んで朽ちてやろうかと思う。そんな根性も無い癖に。

ビルの屋上から空を飛んでやろうかと思う。そんな度胸も無い癖に。

そしてそんな下らない妄言を吐くことしかできない自分が何よりも嫌いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8053u/>

二つの空（仮題）

2011年7月12日03時15分発行